

第2部

活動記録

台風12号被災

～紀伊半島大水害～

まけるな!!和歌山

～紀伊半島大水害～

**まけるな!!
和歌山**



市野々小学校での DMAT 活動



衛星携帯電話を使用して本学へ活動報告



日足地区へ自衛隊のヘリで移動



新宮市佐野市民グラウンドに帰着



被災した熊野川行政局



板倉学長診療風景



避難所へ往診



被災された方への黙祷



岡村病院長往診へ



避難所視察



医療ニーズの情報収集



市野々小学校の臨時救護所入口



診療風景



臨時救護所内



被災した那智の滝



井関保育所



学生ボランティアの二人



診療前の準備作業



診療のお手伝い



情報の整理



熊野川周辺の様子



職員ボランティアメンバー



職員ボランティアの活動現場



まけるな!! 和歌山・熊野

1 DMAT活動

| | | | |
|------------|----------------|---------|------------|
| 派遣期間 | 平成23年9月5日～9月7日 | | |
| 派遣 メンバー | 職 種 | 氏 名 | 所 属 |
| | 医 師 | 島 幸宏 | 救急・集中治療部 |
| | 医 師 | 柴田 尚明 | 救急・集中治療部 |
| | 看 護 師 | 岩井 真弓 | 看護部(ICU)) |
| | 看 護 師 | 内芝 秀樹 | 看護部(8階東病棟) |
| 業務調整員 | 小山 卓也 | 解剖学第二講座 | |

DMAT活動で経験したこと

看護部 / 内芝 秀樹

台風12号で被害を受けた那智勝浦・熊野川町で私がDMATとして活動した内容を報告します。

和歌山県立医科大学病院を出発する時は、現地の状況はほとんどわからない状況でした。まずは、那智勝浦温泉病院の後方支援ということで現地に入りました。温泉病院の状況としては、普段の業務が普段通りに行われている状況でした。そこで、私達はより現場に近い本部で待機し、救出される被害者の方を診療することとしました。現場に向かう途中の車から見た風景は、どこかで見た風景に似ていました。それは、3月11日に起きた東日本大震災で救護班として行った岩手県の状況を、縮小した感じに見えました。家が壊滅し、道路が寸断され、家の塀に車が乗っかり、町の人がなんともいえない表情で家の中

の泥をかき出し、報道の方がカメラを肩に担ぎ、歩き回っているという状況でした。私達が現場で見た患者は1名で幸い軽傷でした。一日目に消防の方から得た情報を基に、二日目は、もともと被害が大きく、道が寸断されているため孤立している熊野川町に自衛隊機で入りました。そこでは、行政局で診療所を開設しました。行政局も川の側に建っているため、2階までは浸水して、使用できる状況ではありませんでした。また、ライフラインが断たれているため、どんな状況の人がいても救急要請をできない状況でした。そこで、地元の医師や保健師、消防士と協力し、避難所を回り、状態の悪い人がいないか診察を行いました。診察をおこなった人のほとんどは、慢性疾患の薬が流され、明日から飲

む葉がないという状況の人や、避難する際に怪我をされた方、被災後の作業中に怪我をされた方でした。

この貴重な体験を終えて思うことは、いつ起こるか分からない災害に対して万全な備えをす

るのは、いろんな意味で本当に難しいと思います。しかし、本当に起こった時のために、今私達ができることは、現在行っている災害訓練の質を上げることと、この災害の体験を伝えていくことだと思います。



2 リハビリテーション科支援活動

| | | | |
|------------|-----------------|-------|----------------------------|
| 派遣期間 | 平成23年9月5日～9月29日 | | |
| 派遣 メンバー | 職 種 | 氏 名 | 所 属 |
| | 医 師 | 田島 文博 | リハビリテーション科 スポーツ・温泉医学研究所 |

那智勝浦町立温泉病院における被災地支援活動

那智勝浦町立温泉病院リハビリテーション科 / 中村 健
那智勝浦町立温泉病院院長 / 木浦賀文
リハビリテーション科、スポーツ・温泉医学研究所 / 田島文博

那智勝浦町は、今回の台風12号により甚大な被害を受けた。特に那智勝浦町立温泉病院に隣接している那智川流域においては、和歌山県内最大の死者・不明者を出す大災害地となった。お亡くなりになられた方々には心よりご冥福をお祈り申し上げ、被災者の方々には心よりお見舞い申し上げます。那智勝浦町立温泉病院には、本学リハビリテーション科から私も含め3名の医師が派遣されている。同病院内研究所の田島所長も含め、我々病院医師、看護師、職員は台風災害直後より医療支援活動を行った。

災害翌日より、同病院木浦院長の依頼にて和歌山県立医科大学のDMATが同地域で活動を行った。同時に病院医師は、被災地より運ばれてくる傷病者の救急対応を行った。さらに、被災地における病院かかりつけ患者の安否情報の収集を地域の保健師と協力して行った。この中で保健師よりリハビリテーション科かかりつけ

患者の頸髄損傷患者が、自宅前の県道が崩落したため自宅より動けなくなっているとの情報が入り、直ちに田島所長が自宅訪問を行った。自宅は水道、電気のライフラインが寸断されており、障害者にとって劣悪な環境であった。このため入院を勧めたが、当初は本人の同意が得られず医師、看護師、保健師、理学療法士がほぼ毎日訪問し健康管理を行った。約1週間後に、ようやく本人の同意が得られ入院が可能となった。ちなみに、病院への搬入は自衛隊が迅速に対応してくれた。

さらに、那智川上流にある集落へ通じる県道が崩落し集落が孤立してしまったため、看護師、病院職員と共に徒歩で集落へ向かい、かかりつけ患者宅への訪問、住民の健康状態のチェックを行った。幸いなことに、健康状態に重篤な問題のあるものは認められなかった。同時に、町内3ヶ所に設けられた避難所への訪問を行った。

避難所は、断水や空調設備の不備等のため環境は良好とは言えず二次健康被害が懸念された。また、被災地に残って生活している被災者の方々の二次健康被害も懸念された。このため、病院長の判断により災害発生1週間後に、被災地に2ヶ所の救護所を開設と同時に、避難所への巡回診療を開始した。救護所は、医大医師にも協力して頂き毎日午後12時～6時まで開所した。避難所への巡回は病院医師、看護師、病院職員により、毎日夕方に行った。1ヶ月間の救護所診療と避難所への巡回診療を行い、延べ307名の診療を行った。

今回、那智勝浦町立温泉病院における被災地支援活動を通じて、災害発生地域に隣接した地域病院における医療支援活動の重要性を認識した。災害時には、ライフラインや交通網の寸断により被災地からの情報収集が困難な状態とな

る。このため、災害地域に密着した地域病院が中心になって医療支援を行う事が重要である。特に和歌山県において紀伊半島南部地域は災害の多い所であり、この地域における医療体制の充実は災害医療を考えた場合においても重要であり、和歌山県立医科大学の果たすべき役割も大きいと思われる。

最後に、災害発生直後にいち早く自ら被災地入りされ、現場の状況を把握し医療支援において迅速に対応して頂いた板倉学長ならびに岡村病院長には深く感謝いたします。また、当地域の医療支援活動に参加して下さいました多くの医大医師、事務等の関係者の方々にも深く感謝いたします。

まけるな！！和歌山



3 医療救護班活動

| 派遣 メンバー | 職 種 | 氏 名 | 職 名 |
|------------|------|-------|--------|
| | 医 師 | 板倉 徹 | 理事長・学長 |
| | 医 師 | 岡村 吉隆 | 附属病院長 |
| | 事務職員 | 山東 孝章 | 事務局長 |

第1班

| 派遣期間 | 派遣期間：平成23年9月13日～9月17日 |
|------|-----------------------|
|------|-----------------------|

| 派遣 メンバー | 職 種 | 氏 名 | 所 属 |
|------------|------|-------|----------------------------|
| | 医 師 | 山野 貴司 | 循環器内科 |
| | 医 師 | 岩崎 安博 | 救急・集中治療部(平成23年9月13日～9月14日) |
| | 医 師 | 中 敏夫 | 救急・集中治療部(平成23年9月14日～9月16日) |
| | 医 師 | 加藤 正哉 | 救急・集中治療部(平成23年9月16日～9月17日) |
| | 事務職員 | 濱路 祐子 | 医事課地域連携室(平成23年9月13日～9月16日) |
| | 事務職員 | 大岩 宏 | 経理課(平成23年9月16日～9月17日) |

第2班

| 派遣期間 | 平成23年9月19日～9月21日 |
|------|------------------|
|------|------------------|

| 派遣 メンバー | 職 種 | 氏 名 | 所 属 |
|------------|------|-------|------|
| | 医 師 | 中谷 宗幹 | 第一内科 |
| 事務職員 | 塩塚 仁 | 学生課 | |

第3班

| 派遣期間 | 派遣期間：平成23年9月22日～9月24日 |
|------|-----------------------|
|------|-----------------------|

| 派遣 メンバー | 職 種 | 氏 名 | 所 属 |
|------------|------|--------|-------|
| | 医 師 | 大林 慎始 | 脳神経外科 |
| | 事務職員 | 今井 善人 | 総務課 |
| | 学 生 | 坂口 紀子 | 医学部 |
| 学 生 | 中原 梓 | 保健看護学部 | |

災害時におけるドクターヘリの運用について

救急・集中治療部 / 加藤 正哉

9月4日第4回和歌山救急災害医療研究会が本学高度医療人育成センターにおいて開催されたが、新宮地域の会員諸氏より当日になって道路事情により参加できない旨の連絡があった。この時には、これほどの大災害になっているとは、予想できておらず、翌5日朝の時点でも、現地医療機関からの支援要請がなかったため、県からも DMAT 出動の要請は出されなかった。

一方、被災地域に医師を派遣している本学の各医局には、現地の大変な様子が個人的なコミュニケーションとして寄せられていたが、あくまでも病院の状況に限られており、地域全体の被害状況はわからないままであった。大規模災害の発災直後は、現場から情報が出てこない事は、過去の事例からも報告されており今回も同様の事態に陥っている可能性がある、との判断より、5日朝に本学附属病院では、病院長の判断として医大 DMAT 1 隊を現地へ派遣することになった。

DMAT を現地に投入する交通手段は、鉄橋の崩落や主要国道の土砂崩れ等により陸路移動が困難であったため、医大ドクターヘリを医療チーム搬送目的で、現地（那智勝浦町）消防本部と連絡調整の上、活用した。災害時のドクターヘリ運用に関しては、これまで取り決めがなされていなかったが、東日本大震災後、各学会等において現実に即した運用ができるようにすべきとの意見が多く寄せられており、近い将来の規約改正が待たれるところである。今回の出動に際しては、通常のドクターヘリ運航ルールに則り、現地那智勝浦消防本部からの依頼という手順を踏んで同地域の臨時ヘリポートに着陸した。派遣チームは現地災害対策本部と共に医療需要を探索し、孤立地区での救護所立ち上げ等を行っ

た。

救急・集中治療部では、現地への DMAT 医師派遣と同時に、その情報を県庁内に設置された災害対策本部に伝え、今後の現地支援をどのように行うべきかを助言することができる災害医療コーディネーター役の医師1名を災害対策本部に派遣した。県内各病院からの DMAT チームの調整や慢性期支援に関する現地保健所への指揮系統の委譲にあたり、本コーディネーターの役割はきわめて重要であった。

災害急性期に現場状況を知り医療支援の要否を判断することは困難であるが、ドクターヘリを投入することにより、医療者の視点からみた情報収集を行うことで早期支援体制を構築することが可能と思われる。また現地派遣と共に早期からの災害対策本部での医療コーディネーターの活動がその後の支援を円滑に行う鍵となることを経験し、今後の災害対策に生かして行きたいと思う。



台風12号災害に対する活動記録～那智勝浦町 市野々、井関地区～

循環器内科 / 山野 貴司

初めに、台風12号被害で亡くなられた方の御冥福をお祈り申し上げますと共に、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。今回、台風12号による被害が甚大であった那智勝浦町の市野々、井関地区で医療活動を行いましたので、その活動記録を御報告させていただきます。

去る2011年9月3日から4日にかけての台風12号がもたらした豪雨は、那智勝浦町内の那智川を氾濫させ、市野々、井関地区を初めとした那智川沿いの集落は大変な被害を受けました。住民の方は家だけでなく、車やライフラインを失い、十分な医療を受けることができていないという町の要請に答え、被害から約1週間が経過した9月13日から17日まで、微力ながら現地で活動を行いました。

市野々地区は当時小学校の2階が避難所になっており、その3階に臨時的診療所を開設しました。

また、井関地区は被害にあった保育園が壊れて残っていたため、その中に仮設のテ

ントを建てていただき、診療所を開設しています。両診療所と勝浦温泉病院を勝浦温泉病院の先生とローテーションを組み、勝浦温泉病院の看護師さんや事務の方と診療にあたりました。

当時はまだ、水道も電気も通っておらず、家に戻れない住人の方々は避難所生活を余儀なくされていました。また、自衛隊がガレキ撤去や行方不明者の捜索を行う中、日中、自分の家を清掃する住人の方も大勢いらっしゃいました。

その中で、避難中や清掃中の放置した傷の治療をしたり、医療機関を受診せず肺炎を悪化させた患者さんなどを診察し、災害の復興に対してわずかながら貢献することができたのではないかと思います。

また、自ら被災されたにもかかわらず、献身的に働く勝浦温泉病院のスタッフの方々から強い感銘を受けました。私自身も、今後この貴重な経験をもとに、病院での診察治療に活かさねばならないと思いました。



診察担当分

| | 場 所 | 時 間 | 患者数 | 外科処置 | 往診数 | 病院搬送 | 救急車 | 備 考 |
|--------|--------|-------------|-----|------|-----|------|-----|--------------|
| 13日(火) | 市野々小学校 | 12:00～18:00 | 8 | 1 | 1 | 1 | 0 | |
| 14日(水) | 井関保育所 | 12:00～18:00 | 14 | 10 | 0 | 0 | 0 | |
| 15日(木) | 病院救急 | 12:00～18:00 | 3 | 2 | 0 | 1 | 1 | |
| 16日(金) | 市野々小学校 | 12:00～13:00 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 午後1時 避難勧告 |
| 17日(土) | 井関保育所 | 中止 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 避難指示 |

台風12号災害医療救護支援活動

医事課地域連携室 / 濱路 祐子

9月4日、台風12号による大雨で那智勝浦町は甚大な被害を受け、そのため、那智勝浦町立温泉病院から救護所への医師の派遣依頼を受けました。

那智勝浦町立市野々小学校と井関保育所の救護所と温泉病院の救急外来の合計3カ所に当院医師2名と温泉病院医師が交替で診療にあたることになりました。

9月13日早朝に医師2名事務1名が車で当院を出発し約4時間で温泉病院へ到着し、市野々小学校と井関保育所に別れて診療にあたりました。

私は9月13日から15日まで事務として救護所の受付業務を行いました。

国道42号線より那智大社へ向かう県道に入ると景色は一変し、河川敷には大きな石が多

数転がり、道路も寸断され土嚢を積み上げようやく車が通れるようになったところでした。

土石流で住宅が流され、跡には流木や大きな石が転がり現地の状況はすさまじかったです。

市野々小学校は3階の音楽室を井関保育所は1階の保育室を救護所にし、被災者の方の診療にあたりました。9月半ばとはいえ、まだまだ暑く、市野々小学校は避難所になっていましたが水道が使えたのは9月15日でした。

被災より10日経っていたので、住宅の後片付け等の疲れで体調を崩されたり、がれきによる切創、捻挫、長時間水に浸かっていたことによる皮膚湿など、1カ所1日につき3名～14名の患者さんが来られました。



自宅が流出されなかった方も、流れ込んだ土砂を早く撤去しないと固まってしまい取れなくなってしまうそうで、連日の作業で疲労が蓄積されていました。ボランティアの方が黙々と住宅の土砂を取り除かれている姿が印象に残っています。また、市野々小学校の体育館が救護所から見たのですが、初日は床が土砂に埋まって体育館とは分からない状態でしたが、自衛隊の方たちが1日かけて土砂

を取り除き、床がきれいに元のように現れたのには感激しました。

被災された方は自家用車が流されたり水に浸かり走行不能であったり、道路が通行止めになり救護所へ来る交通手段がない状態であるため、局所的な被害の場合は、巡回診療や、病院への送迎車を出すなどを、今後、検討した方がより多くの患者さんの診療にあたるかと思います。



4 学生ボランティア活動

那智勝浦医療ボランティアに参加して

医学部3年生 / 坂口 紀子

今回私は大学募集の医療ボランティアに参加させて頂きました。

私は以前、那智勝浦で学習会を開催した際に和歌山県立医科大学医学部リハビリテーション科田島先生をはじめ那智勝浦町立温泉病院の関係者の方々に大変お世話になりました。その時お世話になった人々は無事なのか、那智勝浦はいったいどんな被害を受けたのかとても気がかかっていたので、今回の医療ボランティアの参加を決意しました。

ボランティアは3日間という短い期間でしたがたくさんのことを学びました。

救護所が設置されていた井関保育所で患者さんの受付を手伝うボランティアをしたのですが、救護所に泥がいっぱい残っていたのは衝撃的でした。被災地の救護所に行くというのは頭ではわかっていたのですが、救護所は衛生的なものという先入観を無意識のうちに自分が持ってい

たことに気づいて驚きました。

救護所の設置されていた井関地区は水害の被害がとても大きく、車が泥まみれでひっくり返っていたり、無数の巨大な岩が集落をのみこんでいたり、民家の一階が柱だけになっていました。被害の状況を目の当たりにすることでメディアの映像を見た時とは比べ物にならないほど強く水害の恐ろしさを感じることができました。

また、救護所に来た患者さんの中で印象に残っている方がいます。その患者さんの家は無事だったそうなのですが、水洗トイレが壊れてしまったそうです。そのため、トイレの際は200Mほど離れた近所の汲み取り式トイレを借りているそうです。人の家のトイレを借りるのはどうしても気兼ね無くというわけにもいかないので、トイレに行くのを我慢してしまうと思います。結果、トイレを我慢することまたトイレに行きたくないよう水分補給を控えることで体調



を崩したりしないか、またその患者さんは一人でいらしたので体調を崩した際は病院等に連れていってくれる人がいるのかとかその患者さんの生活背景がとても気になりました。

被災地で見たもの聞いたもののインパクトは非常に強く、ボランティアから帰ってきた後も被災地を度々思い出すきっかけとなりました。

医療ボランティアに参加したことで試験勉強の時間が減りました。しかし、ただ大学生活を送るだけでは学べないことや考えないことをたくさん経験することができ、そしてその得たも

のを大学での医学を学ぶモチベーションへと転換することができました。医療ボランティアに参加して本当によかったと思っています。

貴重な機会を与えてくださった和歌山県立医科大学の関係者の方々、那智勝浦町立温泉病院の関係者の方々、本当にありがとうございました。



救護所ボランティアに参加して

保健看護学部4年生 / 中原 梓

私は9月22日～24日まで那智勝浦町で救護所ボランティアに参加させて頂きました。救護所では、医師や看護師の方々に付いて、災害時医療の見学や受付手伝いをさせて頂きました。救護所は、浸水にあった幼稚園内に設置、ボランティアセンターも併設され、被災地の活動の拠点となっていました。室内にテントを張り、土足厳禁など他と区別をつけ、清潔を保ち限られた環境・物品の中でできる最大限の救護が行われていました。途中、泥かきの作業に参加したいと申し出たところ、「衛生上、救護班は常に清潔を保たなければならない。」と助言を頂き、私

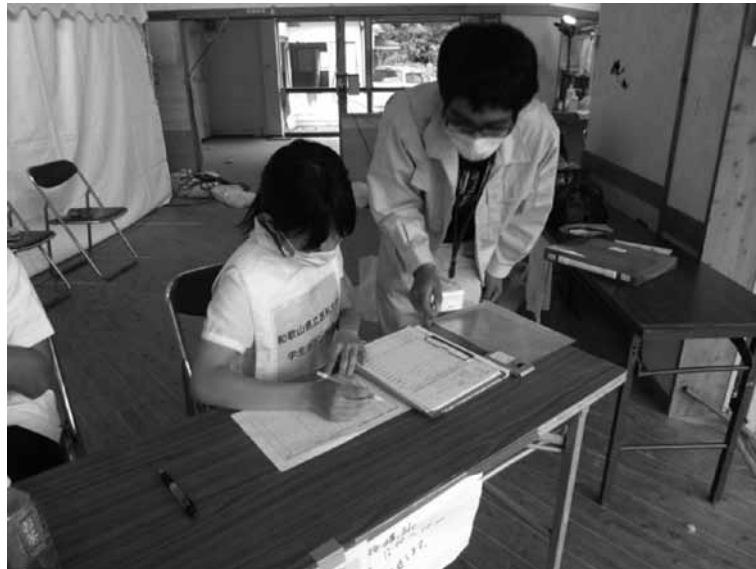
は救護所ボランティアに専念することにしました。被災地では、一人ひとりが自分の役割を把握し、役割を果たす必要性を学びました。被災地ではライフラインが寸断されていたので、ライフラインの復旧状況や救護所の存在を災害放送で情報を提供し、被災者の方が情報に錯綜されないように配慮していました。私たちがボランティアに行った時は被災後2週間たっており、救護所の利用者は1日10名程度と減少傾向にありました。しかし、被災したことや後片付けで、怪我の処置を後回しにし、症状が悪化するまで治療に来ない人が多いことが分かりました。被

災者が非日常を生きる中で、二次災害が起きないよう医療の必要性を伝えていくことも重要だと感じました。また、救護所は被災者だけでなく、ボランティアに来られた方も利用され、被災後も二次災害、三次災害と被災地には救護所は必要不可欠な存在であることも学びました。

今後、将来起きるであろう東南海地震に対して、各医療者の役割の明確化、被災時のライフライン確保、搬送順序・方法の再確認等、災害時対応について具体化する必要があると考えます。災害が起きてからでは遅く、起こる前から

私たちの身に置き換えて考えていく必要があると感じました。

今回このような貴重な体験をさせて頂いた大学・病院の方々に感謝し、災害が起きたことを過去にするのではなく、この経験から災害時の対応・支援について、一人の医療従事者として、一人の人間として考えていきたいと思えます。



5 職員ボランティア活動

派遣期間 平成23年10月22日

| 氏名 | 所属 |
|--------|-------------|
| 板倉 徹 | 理事長・学長 |
| 西上 邦雄 | 副理事長 |
| 伊藤 倫之 | みらい医療推進センター |
| 吉間 一雄 | みらい医療推進センター |
| 石倉 公彦 | みらい医療推進センター |
| 増田 龍三 | みらい医療推進センター |
| 八十瀬富美子 | 薬剤部 |
| 野崎 由里 | 薬剤部 |
| 稲垣 充也 | 中央検査部 |
| 上野 純枝 | 中央検査部 |
| 平康 雄大 | 中央検査部 |
| 久保 泰 | 看護部 |
| 北原 佳典 | 看護部 |

| 氏名 | 所属 |
|--------|------------|
| 塩崎 望 | 事務局次長 |
| 大西 範昭 | 総務課 |
| 宮西 晴久 | 総務課 |
| 小林 洋美 | 総務課 |
| 野見 真洋 | 総務課 |
| 小西 秀彰 | 総務課 |
| 西浦 頼子 | 総務課 |
| 仲 沙織 | 総務課 |
| 西川 みなみ | 総務課 |
| 総田 節男 | 総務課 |
| 平山 千紗 | 卒後臨床研修センター |
| 古家 幸子 | 企画研究課 |
| 田尻 伊津美 | 経理課 |
| 五味 克行 | 経理課 |
| 佐竹 明子 | 経理課 |
| 長尾 夏彦 | 紀北分院事務室 |

新宮市熊野川地区ボランティア活動

和歌山県職員労働組合医科大学支部 / 久保 泰

台風12号により、お亡くなりになった方々に心より哀悼の意を表するとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。被災地域が1日でも早く復興をされますことを願っております。当医科大学支部としましては、上部団体である

自治労和歌山県本部の「県本部災害復興支援計画」に基づく人的支援、また県職労の「1日ボランティア」の参加者を募るとともに、県民の命を守る医療機関で働くものとして、独自の支援を行う必要性を感じました。互助会にご協

力をいただき、予定されていたソフトボール大会を中止し、合同でボランティア活動を行うことを決定しました。

当日は、理事長をはじめ、29名の参加を得ました。夜間からの降雨により国道311号線は通行止めとなっていたため、迂回しての現地入りとなりました。熊野川地区に入ると、災害時の水位の高さを物語るように電柱や電線には草木の枝が引っかかっており、道路よりも高い家までも浸水被害がある状況でした。新宮市ボランティアセンター熊野川サテライトに到着後、2班に分かれスコップや一輪車等の作業道具を準備して、瀨峡観光志古乗船場近くの集会所に向かいました。集会所は原型をとどめているものの、瓦が流され天井から雨水が落ちている状

態でした。小雨の中、瓦礫や木片、ガラス片が散在している中、周囲の泥かき、ゴミの分別作業を行いました。

作業を終えた参加者からは、実際に被災地を見て「ここまで大変な状況であるとは思わなかった。テレビや新聞などからの情報で想像していたよりも甚大な被害であることに戸惑いを感じた。」との声が聞かれました。今回の活動は、自然災害の怖さや、被災地域に対する支援の重要等を再認識する貴重な経験となりました。先日、瀨峡観光ウォータージェット船の運行が再開されるとの明るいニュースを見ました。被災地域の1日も早い復興を願い、今後も労働組合として、また医大職員として復興に向けてのお手伝いができると思っています。

活動から感じたこと

総務課 / 西川 みなみ

ボランティアに向けては、参加者それぞれがさまざまな思いを抱いていました。重なる災害を耳にし目にするたびに募った「自分も何かできることをしたい」という気持ちを一人で行動に表すのは難しいものですが、今回のような機会が後押ししたと思います。

私たちが携わったのは主に民家の拭き掃除でした。報道や人づてに聞いた被災地の様子、バスで向かう道中見た崩れた道路や木の刺さった電線から、どんなにか泥だらけの建物になっているだろうかと想像していましたが、家は想像よりずっときれいでした。しかし天井の近くまで達した泥の跡をみて、きれいになるまでに多くの人々の力が注がれていたことを知り、私たちが仕上げとしてお家をピカピカにする、とい

う気持ちで取り組みました。皆自分の家を掃除する以上によく動きましたが、大勢で取りかかったので疲れすぎるようなことはありませんでした。

災害後の被災地では、人員がいくらでも必要な反面、未経験者の多いボランティアを迎えるのにも労力が要ります。ボランティアセンターの様子を思い起こしてみると、道具がたくさん集められ、到着したボランティア参加者へのオリエンテーション、区域の振り分け、道具のチェックと運搬等々忙しそうでした。被災地の方々は本当に大変だったでしょう。それでも掃除させていただいたお家の方やボランティアセンターの方々の親切で気さくな対応には、実に清々しい気持ちにさせられました。

災害直後はもちろん長期的な復興に向けても、

各人が「何か自分にできること」を行動で示していく事は重要ですが、やはり「自分にできることが何か」が示されていると行動しやすくなります。また非常時であっても、責任感を抱いて行動する各々が疲れすぎるとすれば二次被害となり、長い目で見たときに大きなダメージ

になってしまいます。災害に対応してうまく組織が機能するマニュアルに加え、人間を過信せずそれぞれのメンタルを守るためのマニュアル等を周知徹底することも必要な準備ではないかと思います。





6 台風12号被災支援 那智勝浦町・新宮市熊野川町の活動MAP



熊野川



那智勝浦町の活動拠点となった「井関保育所」

7 那智勝浦町からのお礼状



那温第512号
平成23年10月21日

和歌山県立医科大学
学長 板倉 徹 様

那智勝浦町長 寺本 眞



台風12号災害における医師の派遣について（御礼）

この度の、台風12号による災害では、町民が犠牲となり、家屋倒壊、浸水、道路陥没等、甚大な被害を受けました。

ご年配の方々にお話を伺っても、「今回のような災害は生まれて初めて、親からも聞いたことがない」と話されます。

そのような中、和歌山県立医科大学より早々にDMATを派遣いただき、救護所開設等につきましても職員を派遣いただくなどご厚情あふれるお心遣いを賜り、町民を代表して厚く御礼を申し上げます。

道路も仮復旧し、避難所の殆どが閉鎖となり、9月30日をもって救護所、避難所の巡回業務を終えましたが、診察件数は、300件を超える状況でございました。

今回の災害でも災害時医療はもとより地域医療の重要性を再認識し、新しい病院づくりに役立てていく所存です。

現在、当町では、仮設住宅の建築を始めとする生活再建に向けた取り組みを進めておりますが、都会からのアクセス網が未だ従来状況までには回復せず、観光産業を始め経済活動に大きくその影響が及んでおります。

今後、住民と行政が一体となって町づくりを進めていく所存ではございますが、今後ともご支援、ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げ、甚だ簡単ではございますが御礼のご挨拶とさせていただきます。